英語に見られるほのめかし表現の一タイプについて

峯　正志

1．はじめに　－問題と目的－

留学生に日本語を教えていて彼らによく指摘されるのは，日本語は曖昧であるということである。伝えたいことをはっきりと表現しないため，発話の意図がよくわからないというのである。この事実は多くの人に指摘されており，どうして日本人は曖昧に表現するかについて様々な説明がなされている。よく知られているのは，日本社会は高コンテキスト社会であるとか，日本語は話し手責任の言語であるという説明である。前者は，日本社会はコンテキストに高度に依存した社会であるから，詳しく語らなくとも分かるということであり，後者は，コミュニケーションが上手くいくかどうかは聞き手にあるのだから，話し手は相手が分かるように詳しくはっきりとは話す必要はないという説明である。

しかしこれは比較の問題であり，そのような違いは確かにあるとはいえ，日本語以外の言語でも，曖昧に表現することはある。例えば「依頼」をしたいような場合，相手が目上の人や親しくない人だったりしたとき，また依頼する内容が難しいときは，どのような言語であれ依頼の表現が間接的になることが知られている。

滝浦（2008）[1]には次のような例が載っている。日本語の例ではあるが，これは英語であっても同じような表現になるだろう。

【≪ペンを借りる≫表現における対人配慮】

(1)「借りるよ」…… 配慮ゼロ

(2)「ペン貸してね」…… 共感的配慮

(3)「すみません。ペン，お借りしていいですか？」…… 敬避的配慮

(4)（独語的に）「あれ，困ったな，ペン忘れてきちゃった。」…… 言及回避

相手に対する配慮が大きくなるほど間接的になり，(4)の「言及回避」に至っては，

1　p.26

依頼であることが非常にわかりにくい「曖昧」な表現になっている。

さて，この最後の「言及回避」という表現法は，日本語では「ほのめかし」と呼ばれている。この小論では，英語におけるある種のほのめかし表現が，日本語ではあまり頻繁には用いられないタイプのものであることを指摘し，どうしてそのような表現が英語にみられるのかについて述べたいと思う。

2．日本語のほのめかし表現

日本語のコミュニケーションでは，相手に対する配慮から，聞き手にヒントとなるような表現をして，本当に言いたいことを相手に察してもらう表現が多い。

三宅（2011）[2]は，日本人には当然と思われるような形容詞による表現が，他の言語では機能しないことを指摘する。日本語の形容詞「危ない」「うるさい」「痛い」[3]は，聞き手に対してそれぞれ「気をつけろ」「黙れ」「止めろ」という「行為要求機能」を持つ。これは日本人にとってはごく当たり前の解釈である。日本人の論理ではこのような場合，「危ない（→だから気をつけろ）」「うるさい（→だから静かにしろ）」「痛い（→だからその行為をやめてくれ）」のように，単に形容詞の表す状況が生じていることを示すのではなく，「だからあなたに～の行為をして欲しい」という相手に対する働きかけを示しているのである。

これは日本語の日常の様々な表現の中にみられる論理である。例えば，依頼をして，「難しいですね。」と言われれば通常断られたことだと解釈できる（もちろんいつもそうとは限らないが）。日本にまだ慣れていない留学生なら，「難しいがやってくれるのかな？」と期待するかもしれない。「のどが渇きました」と言えば，普通「だから何か飲み物をいただけますか？」の意味になる。「そうですか」とだけ答えるような日本人はまずいないだろう。

また慣用的な表現にもそのような表現はみられる。例えば，ホームステイするような場合に「これから２週間お世話になります。」と言えば，「（だからよろしくお願いいたします。）」という挨拶になるが，留学生には「２週間お世話になることはお互いに知っている。どうしてそのようなことを言うのか」という反応になるかもしれない。

筆者は，交通標識においてもそのような表現が用いられていることを指摘した。峯

2　p.94ff.

3　三宅（2011）によれば，「うるさい」と「危ない」はこのような使用が「恒常的に可能な形容詞」であり，「痛い」は文脈や状況が整えば可能な形容詞である。

(2008) 交通標識は相手に対して配慮的表現をしなくていいはずだが，「禁止」を表す表現は「ほのめかし的な表現」をすることを指摘した。英語では Don't ～のように，「～するな」と直接的な表現をするが，日本語では「～禁止」のように「禁止されている（→だから～するな）のように間接的な表現になるのである。もし日本語で英語のように（駐車禁止の代わりに）駐車するな」と表現されていたら，何やらその標識を作った人は駐車で迷惑を受け，怒っているような感じを与える[4]。

しかし，実際にはこのようなことは日本語だけに見られるというわけではなく，他の言語でも用いられていることであろう。英語でももちろん用いられているだろう。言語間で異なっているのは，その様な表現を使うかどうかではなく，どの程度頻繁に使うか，またその場合の語用論的機能の強さの度合いがどう違うか，ということなのであろう。そのような違いを明らかにするには，更に日本語と他の言語の様々な例を調べていかなければならない。

3．英語のほのめかし表現

英語においても，日本語と同様なほのめかし表現は可能である。筆者が気づいたものをいくつか挙げると次のようなものがある。

This is not up to my standards.「これは私の基準に到達していない！（→だからこれはだめです)」という表現は断るときに使われる。映画などで，強盗がお金を要求し，被害者がなかなかお金を出さないような場合, You heard me. と言って脅すことがある。これは明らかに「俺の言ったことは聞こえたよな（→だから，言うことを聞け)」の意味である。また，This is the last straw. と言えば慣用句で，「それが（怒りを止める）最後の藁だ（→だから，もう怒ったよ)」という意味である。ほのめかしは「相手と自分のフェイス侵害を避けることを優先して，要件への直接的な言及を回避するストラテジー」[5]だから，基本的には言いにくいことを避けるための表現である。依頼を断ったり，上のような脅迫や怒りの場面で使われるのが基本的な使い方であろう。しかし，もちろんそのような使い方ばかりでなく，表現上の効果を狙うような使い方もある[6]。

4　高速道路には様々な情報を示す標識があるが，ラジオの周波数を示す表示も，日本語ではただ周波数を示すだけ「NHK 第一放送1224Hz。(→よろしければ聞いてください)」だが，アメリカでは「Tune to ～Hz」と直接表現になる。交通標識ではないが，スポンサーを求める広告塔にも日本語では「広告募集中」となるところ，英語では「Advertise here」となっていた。

5　滝浦 (2008) p.41

ある映画で，「You are the boss（→だからあなたの言うとおりにしますよ）.」というセリフがあったが，これなどは言いにくいことというよりもあなたがボスであることを強調し，相手を喜ばせるという効果を狙ったレトリック的な使用法であろう。

さて，滝浦（2008）には，Brown & Levinson（1987）の挙げた，ほのめかしの15の下位タイプが紹介されている。それは以下のようなものである。

① （動機や条件を）暗示する	「今日は暑かったから喉が渇くね」
② 話の水を向ける	「うち，この近くなんだ」
③ 前提に語らせる	「ああ，今日もまた皿洗い当番だ！」
④ 少なく語る	「おう，最近どうだ？」「べつに，普通，かな」
⑤ 余計に語る	「来々軒ってどこですか？」「そこの角曲がったとこだけど，この辺の人はあまり行かないね」
⑥ 同語反復を用いる	「それ，おいしい？」「カップ麺はカップ麺だよ」
⑦ 矛盾したことを言う	「あの人，好き？」「好きなような，嫌いなような」
⑧ 皮肉を言う	「家にこもるしかない最高の天気の連休だった！」
⑨ 比喩を用いる	「王子様さがすのも大変だからねえ」
⑩ 修辞疑問文を用いる	「私が悪いのかな？」
⑪ 多義的に言う	「あの人，AB 型だから」
⑫ あいまいに言う	「どこかで誰かさんと会っているんじゃないの？」
⑬ 過剰に一般化する	「安物買いの銭失いって言うね」
⑭ 聞き手を他人に置き換える	（何人かで会食をしていて年長者など直接には頼みにくい相手がいる場合）「誰かそこの醤油とれる人いる？」
⑮ 言いさしでやめる，省略する	「あ，社会の窓・・・・・・」

このように様々なストラテジーがあるわけだが，以下では，上のストラテジーに分

6　滝浦（2008）p.42にも，ほのめかしを用いるフェイス・リスクの回避以外の動機づけとして，「レトリック的な発話効果への期待」が挙げられている。

類しにくいような英語のほのめかし表現を紹介したい。

次の例[7]を見てほしい。

最近の調子を聞かれたときに，Can't complain.「不満は言えません（→まあ，順調ですよ)」と答えることがある。順調だから不満は言えないということなのだが，これは上で見たほのめかしとはやや構造が異なる。ほのめかし表現をPとし，本来言いたかったことをQとすると，上で見たほのめかしの構造は以下のようなものであった。

(1)　P（→だからQ)

因果関係から考えると，理由の方を述べて結果を察してもらうという構造である。一方，ここで扱う表現の場合は，下のような構造を取る。

(2) P（→なぜならQだから）

この表現は，結果の方を述べて理由の方を相手に訴える形を取っている。このような構造の表現は日常会話の表現に多く見られる。他の例を見てみよう。

You can say that again.「おっしゃる通りですね。全くその通りだ。」もう一度言ってもいいくらいだと思うのは，相手の言い分が正しいからである。

You are telling me!「その通り！」私が言うべきことを，あなたが私に言っている，よく分かっていますね。ということだ。

これらの表現は日本人には分かりにくいように思われる。しかし，次の表現は日本人でもわかりやすい。

You couldn't ask for better weather!「これ以上の天気は望めないね。」最高の天気だから，そのように思うのだが，日本人なら普通「これ以上の天気は望めないね。」より「最高の天気だね」という表現を使うだろう。

前の状況を認めたうえで，「～せよ」と命令の形を使うものもある。

「(苦しい立場の人に対して)こちらも同じですよ。あなただけではありませんよ。」と言う場合に，Join the club. と言う。これは同じ境遇だから，仲間になりなさいということだろう。

スポーツなどをしていて上手な姿を褒めるときなどは，「とてもいい姿！すてき！」の意味で，Look at you! を使う。上手だから（自分で）見てみなさいというところだろうか。

相手の発言や質問に対して強く肯定する言い方として，I'll say.「全くです。」とい

7　以下の例はすべてNHKのラジオ英語プログラム（実践ビジネス英会話，入門ビジネス英語，ラジオ英語会話）から採ったものである。

うのもある。これはI'll say it is. のことである。

同様な構造を持つ表現としては他にも，次のようなものがある。

Come again?	何ですって？
I can't tell.	分かりません。
Tell me about it.	（相手の発言に対して）わかるよ [ごもっとも]。
I thank my lucky stars.	「自分はすごく幸運だと思う」
Time will tell.	「時がたたなければ分からない。」
I'll bet.	「きっと～だ。きっと～だろう」
You bet.	「もちろん」
You name it.	「そのほか何でも」（いくつかの具体例を挙げた後，それ以外のものをまとめてさす言い方。）

これらの表現は，上述のBrown & Levinson（1987）の挙げたストラテジーの中では，③の「前提に語らせる」というのが近いように思われる。実はこのストラテジー①から③までは，グライスの４つの格律[8]のうち，関係の格律（maxim of relation）違反とされるものである。形式的に考えれば確かに「前提に語らせる」というこの分類にあてはまるものであるように思われるが，前提そのものを明確に相手に伝えようとするこの用法の機能を考えると，少なくともこの用法の下位分類として扱わなければならないように思われる。

これらの表現の特徴は相手への配慮からこのような表現を選んだのではなく，表現上の面白さを狙ったレトリック的なものであるということである。このような表現は日本語で全く無理というわけではないが，普通は上で挙げた訳文の表現を使うのが普通だと思われる。ただ，次の例のように冗談めかしたような場面では日本語でも言うかもしれない。

（彼らがすばらしいマンションに住んでいると聞いて）wow! Where do I sign up?

「私はどこで登録すればいいかな？」

次の章では，なぜ英語がこのような表現を（日本語より）好むのかについて考えてみたい。

8　グライスの格律については，例えば山岡・牧原・小野（2010）p.44ff. 参照のこと。

4．出来事の経過と出来事の結果

影山（2002）では，日本語と英語の出来事に対する視点の違いを論じている。英語の persuade と日本語の「説得する」（同様な例として to drown ／おぼれる，to help ／手伝う等）を挙げ，過去形にした場合，persuade は説得行為だけでなく相手の気が変わること（結果）までも含意するが，日本語の「説得する」は説得行為だけを行い結果までは含意しないことから，英語は出来事の最終的な局面を重視する言語，日本語は最終的な結果より途中の過程に着目する言語であるとしている[9]。

この性質は他の様々な現象にも関わっているとして，多くの例が挙げられている。例えば，自分の位置を表現する場合に，英語では到達点からどのくらい離れているか，日本語では到達点までどのくらい離れているかを表現するという。英語では到達点から見ている表現となっている。また，「お腹がすいた／ I am hungry.」の例では，日本語では「お腹がすく」という過程を表現するのに対し，英語ではその結果の状態を表現するという。その他の表現で筆者が見つけた例では，日本語の映画の英語字幕で，「私は後20日しか生きられません。」というのが I will die in twenty days. となっているのがあった。日本語の表現は現在の視点であるのに対し，英語の表現は終点（死）からの視点になっている。

さて，これらと同様の例の中に次のようなものがある。人にものをあげるとき，日本語では，「これ，差し上げます」というが，英語では I'll give this to you. というと押しつけがましく聞こえるので You can keep this. というように，you を主語にすると自然な表現になるという[10]。では，筆者が見つけた次の例はどうだろうか。

The house is yours. 「家をおまえにやる」

仕事の報酬として家をやるというのだが，「(お前に家をやる→つまり）家はお前のものだ」という論理であり，譲渡の結果（あなたのものである）の方を表現している。これと同様の例として，多少冗談めかした例だが，ある映画のセリフで次のようなものがあった。

Are you Mr.---? You found him!「～さんですか？」「そうだ」

これも上の例と同じで，「(その通りだ→つまり）お前はそいつを見つけたのだ！」という論理である。

9　p.12

10　p.24

英語はこのように出来事の結果に視点があり，経過の方より結果の方を述べる形で表現するという傾向がある。このような英語の性格が，上で述べたような「結果を述べて前提を主張する」というタイプのほのめかし表現の多用につながっている可能性は大いにあるのではないだろうか。

5．結論

日本語でも英語でもほのめかし表現は存在するが，日本語にはあまり用いられないタイプの表現として，結果または帰結を述べることで前提をそのまま肯定してしまうものがあり，英語ではよく使われる。英語でそのような表現が普通に使われる理由として，影山（2008）の指摘した英語の性格，つまり英語は出来事を結果に注目して表現するという性格がこのような表現の基礎となっている可能性がある。

【参考文献】

Brown, P. & Levinson, S.（1987）Politeness：Some Universals in Language Usage. Cambridge University Press
影山太郎（2002）『<もっと知りたい！日本語>ケジメのない日本語』岩波書店
峯正志（2008）「交通標識における日本語の「ほのめかし」表現」『金沢大学留学生センター紀要』p.23-34 金沢大学
三宅和子（2011）『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』ひつじ書房
滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
山岡政紀、牧原功、小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現　日本語語用論入門』　明治書院

On a type of English off-record message and its motivating cause

Masashi Mine

ABSTRACT

Levinson and Brown (1987) says if a speaker wants to do an FTA, but wants to avoid the responsibility for doing it, he can do it off record and shows fifteen strategies for that. This study shows that one type of such off-record message is more often used in English than in Japanese and it could be motivated by Kageyama's theory (Kageyama 2002) that English expresses an event from its endpoint (its result) while Japanese focuses on the process to express the event.

An example of such off-record message is the following:

Expression: "Join the club"

Message: (we are in the same situation!)

This off-record message has this structure:

Phase 1: We are in the same situation.

Phase 2: So, you can join our club.

Phase 3: Join the club!

If we take these three phases for one event, English clearly expresses the event from the endpoint, while the corresponding Japanese expression will be the one of Phase 1 (「私も同じですよ。」 Watashi mo onaji desu yo.).